

キューバにおけるサンテリア信仰をめぐる人類学的実践

井上 大介

1. はじめに

1993年以降、キューバにおいて、サンテリア信仰¹⁾を筆頭に、パロ・モンテ²⁾、アバクア³⁾といったアフリカ起源の宗教実践が活性化している。先行研究によればキューバ国内における宗教実践の自由化を広く承認する法改正が、それまで秘密裡に実践されていたそれらの宗教習俗を社会空間において顕在化させているという。またキューバからの国外移住者の増加、キューバへの外国人観光客の増加、国民のドル保持の承認などといったキューバにおける種々の社会変化が新たな信者の増加を促していると指摘されている(工藤 1998 : 494-516, 1999 : 12-27, 大杉 2005 : 437-459, Argyriadis 2005 : 85-106)。

サンテリアと呼ばれる宗教習俗は、現在アメリカ大陸の全域に存在しているとともに、ヨーロッパにもその影響を拡大しつつある。

また同信仰は、キューバを中心としたローカルな日常的次元における宗教実践として発展しているとともに、ブラジルのカンドンブレ、ハイチのブードゥー、北米のオリシャ崇拜⁴⁾などとも連動し、グローバル化する現代社会におけるトランス・ナショナル⁵⁾な宗教実践としても注目されている。

1) 詳細は本論第3章参照のこと。

2) アフリカ・バンツー系宗教。

3) アフリカ・カラバリ系宗教であり男子のみの秘密結社。

そのような文脈において、同信仰の正統的伝統をめぐるヘゲモニーの実践⁶⁾は、キューバにおけるサンテリア信仰実践者のみならず、アフリカ起源の文化をナショナルアイデンティティとして活用してきたキューバ国家にとっても、文化をめぐる政治的、経済的理由を中心に、重要なテーマとなっている。

キューバ国内の動向においては、現在、ハバナ市を中心に、サンテリア信仰の組織化が様々な実践者によって促進されつつあり、そのような流れにおいては、文化人類学をはじめ、社会科学の諸言説が信者によって流用され、ヨルバ文化に関する正統性をめぐる権力闘争が組織化の進展とともに顕著になってきている。

本稿では、サンテリア信仰を、文化をめぐる正統性およびグローバル化におけるローカリズムとナショナリズムの相克という観点から、同信仰をめぐる歴史的・政治的動向とその変遷、科学的言説とその流用という点を中心に考察を展開したい。

そのため前半では、キューバ人類学のパイオニアであるフェルナンド・オルティスを中心に展開されてきたアフロ・キューバ研究に注目し、そこに立ち現れるキューバ国民文化としてのアフロ・キューバ性の抽出およびサンテリア信仰の位置づけについて考察する。またオルティス以降の研究の動向、および科学的実践における宗教的影響について先行研究 (Ortiz 1984, 工藤 1998, Argyriadis 2005など) をもとに整理する。

後半では、現代のハバナにおけるサンテリア実践者への調査記録を提示し、組織化の傾向、人類学的言説の流用、経済の自由化による変化などを含む、

- 4) オリーシャとはヨルバ系宗教における神 (あるいは精霊, 聖人など) の名称。複数系はオリーシャスとなる。本論に登場するオリーチャやオチャという名称もオリーシャの同義語として頻繁に使用されている。また本論の主題であるサンテリア信仰はレグラ・デ・オチャ (オチャの規則) という名称でも知られている。
- 5) 同概念に関しては「人類学から見たトランスナショナリズム研究: 研究の成立と展開及び転換」(上杉 2004) 等を参照のこと。
- 6) 同概念に関しては「サンタ・ムエルテ教会をめぐるヘゲモニー」(井上 2012) を参照のこと。

現代の諸相を信者のコメントから分析し、サンテリア信仰が科学的諸実践との連動で、どのような変遷を経て現代に至っているのか、という点について考察したい。またサンテリア信仰の組織化について、そのような動向の中心に位置づけられるキューバ・ヨルバ文化協会を事例として正統性、ヒエラルキー化を意図したサンテリア信仰の組織化およびその背景にあるグローバル化におけるトランス・ローカルという現象について分析を企てたい。

2. キューバにおけるアフロ・キューバ文化に関する人類学的研究

キューバ人類学は、1900年代初頭以降フェルナンド・オルティスによってその基礎が形成されていくが、そこでは、アフロ・キューバ宗教が国民文化においてどのように位置づけられていくべきか、というテーマが重要な位置を占めていた。そのようなテーマはキューバ国内の政治状況の変化、学術的な枠組みの変化といった時代状況によって様相を変化させつつ今日に至っている。

一方、現在ではそのような社会科学的言説を、各宗教実践に流用し、自らの宗教的正統性を保持しようとする動きも顕著となっている。

キューバにおけるサンテリア信仰は、砂糖のプランテーション栽培のため、アフリカから奴隷としてキューバに連れてこられた黒人たちの習俗がカトリック信仰と融合して発展したものである。14世紀当時、黒人たちは出身地や言語グループにそってカトリックの下部組織であるカビルドと呼ばれる共同体に振り分けられ、過酷な労働を強いられるとともに、カトリックへの改宗を余儀なくされていく。しかしこのカビルドという共同体は、黒人たちのアフリカ起源の宗教を含む音楽や舞踊といった文化的実践を維持するための空間を提供することとなった。そのような状況において、黒人たちは、カトリックへの改宗を表面的には受け入れつつも、自らの宗教的要素をカトリックの諸要素と結びつけながら、その伝統を保持していったのである (Ortiz 1984, Barcia/Rodríguez/Niebla 2013)。

一方、フェルナンド・オルティスがアフロ・キューバ研究に着手した20世紀初頭のキューバでは、近代化、公衆衛生の強化といった観点から、アフリ

カ起源の宗教実践が取り締まられ、黒人狩りという政治状況が活発化するようになっていた (Lachatañere 2011)。

フェルナンド・オルティスはイタリアの犯罪人類学者チェザレ・ロンブローソの学問的関心に基づき、アフロ・ブラジル宗教の研究を展開していたニーニャ・ロドリゲスの著作などを参照しながら、キューバにおけるアフリカ起源の宗教実践をブルヘリーア (呪術の意) という名称で対象化し、民族誌学的調査・記述を行うとともに、そのような宗教実践における信仰心を評価しつつも、社会の発展のために同種の習俗を排除していくべきであるという論を展開した (Ortíz 2007)。

フェルナンド・オルティスはその後、アフロ・キューバ文化を音楽に特化して研究するとともに、1920年代には自らも、アフリカ起源の音楽的实践をキューバ社会で発展させるべく努めていく。具体的には、自らの民族誌学的知見をもとに、若者を中心としたアフロ・キューバ芸術運動の代表的存在として、キューバにおけるアフリカ起源の音楽や舞踊を中心とした芸術運動を推進する。ここで特筆すべきは、そのような芸術運動の方向性は、これまでの先行研究でも指摘されている通り、従来、アフリカ起源の宗教実践において重要な要素を占めていたそれらの音楽・舞踊、具体的にはサンテリーアのバタ演奏や秘密結社アバクアの舞踊などが、巧妙に脱文脈化され芸術的資源として、ひいてはキューバ国民文化の中心的要素として活用されていくこととなっていくのである (工藤 1998: 494-516)。

またこれらの運動はアメリカによるキューバへの政治的支配と経済危機に対する抵抗文化としても活発化していったとされている (Argyriadis 2005: 85-106)。

その後のオルティスのアフロ・キューバ研究 (Ortíz 1984, 2007) では、トランス・クルトゥラシオン (トランス・カルチャー化の意)、クバニダ (キューバ性の意)、アフロ・キューバ・フォークロアといった用語が頻繁に登場し、「アヒアコ・クバーノ」⁷⁾ という概念によってキューバ文化の雑多性が強調されているが、そのような文化理解は依然として宗教的文脈から距離をおいた形で、具体的にはアフリカの芸術が現代キューバにとって価値あるものであるのに対し、アフリカの宗教性が同社会にとって過去の遺物であ

るといった主張のもと、続けられた。

一方、1930年代の宗教研究においては、当時の研究者の間で、サンテリーアと「ブルヘリーア」の関係をいかに位置づけるかが議論の中心となっていた。

研究者の間では、サンテリーアはヨルバ系黒人（ルクミと呼ばれることもある）の宗教実践であり、その他のアフリカ系宗教よりも美しく、気高く、教養があり、伝統的であるという主張がなされた。一方、バンツ系のパロ・モンテは、よりシンクレティックで、後進的なものとされた。そして特に後者に対し「ブルヘリーア」という敬称がより用いられる傾向にあった。このような差異化は、当時のアフリカ系人種における差別意識に纏わるステレオタイプと密接な関係を有していたという。つまり、西アフリカのスーダン系の黒人は、アフリカ南西部の人種よりも美しく、文明化されているといった言説に依拠していたのである。そのような傾向は、キューバにおける宗教実践者においても取り入れられ、サンテリーア実践者はパレーロ（パロ・モンテの実践者）を「ブルヘリーア」という名称で蔑視するようになっていった（Lachatañere 1939）。

1940年代から50年代においては、アフロ・キューバ宗教の正統性をめぐる議論がより活発となっていく。人類学者の著作はそのような文脈において流用され、正統性を担保する言説として普及していった。また宗教実践者においても、自らの宗教習俗をテキスト化するという傾向がこの頃から顕著になっていく（Angarica : 2009）。

1960年代から1970年代前半にかけては、キューバ革命の影響により、革命政権とカトリック教会の関係が緊迫したものとなると共に、サンテリーア信仰が革命政権の推進する社会の発展を妨げる要素であるといった言説が顕著となる⁸⁾。アフロ・キューバ文化研究においても、アフリカ起源の文化につ

7) キューバのごった煮料理のこと。同概念をキューバ文化のメタファーとして強調した論文については“Los factores humanos de la cubanidad”（Ortíz 1940）を参照のこと。

8) この頃、キューバでは心霊主義の影響も顕著となり始める。なおここでいう心霊主義とは、フランスのアラン・カルデックが展開した霊との交信術のことを指す。

いて、宗教的実践が社会的に有害なものとして語られると共に、芸術的要素に特化した諸相のみが価値あるものとして主張されていった。

その後、革命政権とカトリック教会の関係は徐々に友好的なものになり、1976年には信教の自由を保障する新憲法が成立する。またフィデル・カストロとブラジルにおける「解放の神学」推進の中心的人物であるレイ・ベトとの対談集が発刊された。同書では宗教に関するフィデル・カストロの寛容的見解が示され、キューバ政府と宗教、なかんずくカトリック教会との親和的關係が示唆された (Castro 1985)。

1980年代には、サンテリーアの実践を綿密な調査によって記述したりディア・カブレラ (Cabrera 2009)⁹⁾ やサンテリーア実践者であるロドリゲス・ソウサの著作 (Sosa 1982)、旧ソ連で人類学を学んだヘスス・グアンチェの著作 (1983) などが刊行されていく。

ソ連邦が崩壊した1990年、革命政府は、マルクス主義とキリスト教の同盟を提案するとともに、1991年の第四回キューバ共産党大会においては宗教実践者の入党を承認し、無神論国家から世俗国家に移行するに至った。

このような変化はキューバの経済事情とカトリック教会との関係に連動したものであったが、これまで秘密裡におこなわれてきたキューバにおけるアフロ・キューバ系宗教の信仰実践を社会空間の中で顕在化させ、活発化させる主要因となっていったのである。

以後、信者であり民族学者であるナタリア・ボリバル (1990)、ラサラ・メネンデス (2009a, 2009b, 2009c, 2009d) らの著作が出版され、国内外にサンテリーアの教義、儀礼的実践、世界観に関する書籍が普及し、サンテリーア実践の理論化や権威化が進展していくこととなる¹⁰⁾。

9) 初版は1981年。革命政府に批判的であったりディア・カブレラの言動により、発禁処分となった本書は、革命政府の宗教へ寛容政策とそれによるサンテリーア信仰の顕在化とともに、1996年に再版されることとなった。

3. 現代のサンテリア信仰実践者の諸相

現在、キューバのハバナ市では、サンテリア信仰がかってないほど顕在化しているとともに、活性化している。筆者が2014年8月に1ヶ月間滞在したホテル・ナショナル・デ・クーバにおいても、レストランの従業員やベッドメイキングの担当者など相当数の人々が信者であると表明した。またタクシー運転手などにも本人および家族、親戚、友人の中に多くの信者がいる、とのコメントが頻繁に聞かれた。

正確な数は不明であるが、このような日常的な環境の中でのやり取りにおいて、相当数のハバナ市民が、サンテリア信仰に関与していることが伺い知れるのである。

そのような中で調査対象者をランダムに選択していくこととした。出会ったハバナ市在住者の中でサンテリア信仰に関連しているとみられる人びとを訪問し、彼らのパドリーノ、マドリーナ（それぞれサンテリア信仰における宗教上の父、母を意味する）を紹介してもらいつつ、宗教儀礼に参加させてもらい、情報を収集していった。2013年の2週間の調査および2014年8月の1ヶ月の調査では約30名のサンテリア信仰実践者にインタビューすることができた。調査での第一印象は、サンテリア信仰の実践形態は非常に多様であり、また日々変化しているというものであった。パレーロの呪術的

10) 本調査のもう一つの目的は、フェルナンド・オルティス以後のサンテリアに関する人類学的記述にどのような傾向があるかを、より詳細に検討することであった。具体的にはリディア・カブレラ、ナタリア・ボリーバル、ラサラ・メネンデス、ヘスス・グワンチェ（Guanche 2010）をはじめ、信者として人類学的概念を自らの信仰実践に援用することを企てているネルソン・アヴォイ（未刊行の博士論文）の著作などを分析するとともに、研究者や宗教実践者にその評価を確認するという作業を通じて、それらの研究がどのような意義を持っていたかという点を明らかにしたいと考えた。また宗教実践者による人類学的著作と研究者が宗教実践者となり研究を継続した場合の著作にどのような傾向がみられるかという点を解明するつもりであった。今回は、資料は蒐集できたものの、分析を完了するには至らなかったため、これらの点は今後の課題としたい。

実践と結びついたもの、カトリックと連動するもの、霊気や仏教などアジアの宗教的慣習を取り入れ、仏像などをサントとして自宅に設置する者なども複数確認できた。以下では、サンテリーア信仰の概要についてふれたあと、上記の調査内容を提示したい。

サンテリーア信仰はオルドゥマレマレ（オロフィ）と呼ばれる至高神を中心に、特定のオリーシャスを守護神として授かり、占い、生贄、さらにサントを象徴する聖なるバタ太鼓の演奏などをベースとした儀礼¹¹⁾で構成される信仰習俗である。

表 1：サンテリーアにおける主な神々¹²⁾

神	カトリック聖人	機能／属性	生贄
オバタラ	聖メルセデス	万物創造の神／純潔	ネズミ、鳩、雌鶏等
エレグア	聖アントニオ	道を開く神／運命	雄鶏等
オゲン	聖ペドロ	戦いの神／鉄	犬、ヤシの実等
チャンゴ	聖女バルバラ	雷・太鼓の神／男性	雄羊、子山羊、バナナ等
ジェマジャ	聖母レグラ	海の神／母性	雄羊、魚、鳩等
オチュン（オシュン）	聖母カリダ・デル・コブレ	愛の神／女性	子山羊、鳩、雌鶏等
オスン	聖フランシスコの杖	魔法儀礼の神	無し
ババル・アジェ	聖ラサロ	病の神／治病	煙草、鳩、雌鶏等

11) 近年バタ太鼓は聖なる神具としてのみならず、俗的なものも多数存在するようになっており、観光客向けの文化的・芸術的出し物としてのその存在が顕著になってきている。詳しくは工藤1998を参照のこと。なおサンテリーア信者がバタを演奏するには特別な儀礼により承認されなければならない、儀礼においてバタ演奏が必要となった場合、通常は演奏を許可された特別な人々に謝礼金を払い行ったもらうこととなる。

12) Aさんへのインタビューを中心に整理をおこなった。

オサイン	聖シルベストレ	植物・葉草の神	雌鶏等
オチョシ	聖ノルベルト	狩猟の神／弓	鳩, 雌鶏等
アガジュ	聖クリストバル・ デ・ラ・ハバナ	川の神	魚, 雄羊等
オジャ (オヤ)	聖母カンデラリア	墓場の神	鳩等
オルーラ	聖フランシスコ・ デ・アシス	占いの神	雄羊, 鳩, 子山羊 等
インレ	聖ラファエル	農業の神	鳩, 鋏, 魚等
オベジェス	聖コスメ, 聖ダミ アン	幸運の神	血液等



写真1：チャンゴほか
(筆者撮影2014年8月 ハバナ市)



写真2：オスン
(筆者撮影2014年8月 ハバナ市)

表1で示した項目はオリージャスの代表的な名称である。それぞれが人間をかたどった象徴、色、および石を筆頭とした「もの」で表現される。

サンテリーア信仰への入信はイニシアシオン（入信儀礼）と呼ばれる加入儀礼によって成立する。入信は入信者と守護神との契約を意味する。入信によって個人は生涯、守護神を護っていくことを誓うのである。入信において個人は、サンテリーアの神話、儀礼、神々についての一定の知識を要求され



写真3：オグン他（筆者撮影2014年8月 ハバナ市）



写真4：オバタラ他（筆者撮影2014年8月 ハバナ市）

る。

その後、それぞれの信仰体験、儀礼知識、サンテリア信者との相互行為の深化などを通じ、ババラオと呼ばれる師匠の資格を得るかどうかを選択することとなる。ただしその選択には、占いによる許可が必要となるのみならず、一人以上の改宗者を獲得することが課せられている。

ババラオになるには、イファと呼ばれる儀礼を経ることが課せられている。これにより、個人はイファ占いを行う権利を得るとともに、その他のサンテリア信者から師匠的存在として尊敬の対象とされていく。またアイハード(宗教的な弟子)を持つことが許され、種々の儀礼における権威的存在となっていくのである。一端ババラオとなると終生その責任を背負うこととなり、今度は人々を改宗させることを自身の第一の使命として生活を展開することとなる。

上記した教義、儀礼、神々、パドリーノ、マドリーナとアイハードの関係などは多くのサンテロに共有される共通事項である。しかし現在、キューバのハバナ市において、サンテリア信仰は非常に多様な形で展開しており、各信者の実践においては、パロ・モンテや心霊主義、キリスト教、その他霊気や仏教などとも融合するといった傾向が確認されている。

以下では何名かの信者へのインタビュー結果、具体的には、サンテリア信仰の多様性、信仰による変化、サンテリア信仰に関する認識、キューバ社会、グローバル化、科学と宗教の関係、サンテリア信仰の正統性、組織化などに関するコメントを提示し、現在ハバナ市で信仰を実践する人々の様相をみていきたい。

まずはじめに、科学とサンテリア信仰の関係について言及した以下のコメントを紹介したい。

Mさん (54歳 女性)

「サンテリア信仰を30年以上続けています。家族の影響で信仰を開始しました。私は、ハバナ大学でコミュニケーション学の博士号を取得し、現在、ある学術協会の会長を務めています。従いまして、科学的教育を十分に受け今日に至るわけですが、サンテリア信仰はそのような私にとっ

ても非常に魅力的なものとなっています。非常に合理的であり、道理にかなった教えだからです。キューバは教育レベルが高く、多くの国民が大学まで教育をうける機会を有しています。私の周囲にも、教育レベルが低いためにサンテリア信仰に傾倒している、といった人たちよりも、むしろそのような人たちもいますが、むしろしっかり高等教育を受けた上で、サンテリア信仰の実践にいそしんでいる人たちがたくさんいるのです。これは科学と宗教が相矛盾しないことを証明している一例ではないかと思うのです。科学が進展しても、人々の人生における幸不幸、死といった問題は避けようがありません。そのような人間、生物における不可避な問題に答えを明快に与えてくれるのがオリーシャ信仰なのです。サンテリアとキューバ性に関しては当然我々がアフリカに起源をもつ人間であるということから理解できるでしょう。人類の起源はアフリカです。宗教の起源がアフリカから伝承されたサンテリアであるということはできないかもしれませんが、我々はアフリカ起源の宗教実践に大きな誇りを抱いています。サンテリア信仰は現在、世界の多くの地域で広がっています。その中で、キューバでの実践が非常に大きな位置を占めるようになってきていることは好ましいことだと思います。ただ重要なことは信者の日常生活における幸福だと思えます。』

ここでは、科学的思考がサンテリア信仰の教義、実践と矛盾しないことが強調されている。呪術信仰は多くの場合、教育レベルの低い人たちの間で実践されているという印象がもたれているが、コメントではキューバにおいては高学歴層の中にも、多くのサンテリア信者がおり、そのような人々の中では、科学とサンテリア信仰が矛盾なく共存しているといった状況にあるという現状が示唆されている。また同時にサンテリア信仰とキューバの結びつきを重視している態度も示されている。

次のコメントは、サンテリア信仰における恩恵や人間関係、組織について言及する2年前にババラオとなった男性の主張である。

Aさん (39歳 男性)

「私は生まれたときに母親の影響でマノ・デ・オルーラという初歩の入信儀礼を受けました。しかし宗教的实践を本格的にはじめたのは8年前のことです。私は高校を卒業し、煙草会社に勤務しましたが、すぐに退職しました。24歳で結婚し27歳で離婚しその後再婚を繰り返しました。現在は5人の前妻の間に5人子供がいます。私はサンテリアに入信するまで酒を飲んで喧嘩をし、刑務所にも入り、無茶苦茶な生活を繰り返していました。そのうち酒の飲みすぎで内臓の病を患いました。そのような時、知り合いのババラオに診断してもらい、自身の生活態度を改善すべく、イニシエーション儀礼を経てサントを授かりました。私のサントは戦士チャンゴです。2年前からババラオとなり、アイハードを持つようになっていきます。本格的に信仰を実践するようになり、私の生活は大きく変化しました。サントの教えを忠実に守ることにより、断酒にも成功し、暴力的な態度も改善しました。サンテリアは様々な生活法だと思います。よりよい生活を送るための知恵を授けてくれる信仰なのです。まだまだ勉強中でわからないこともたくさんあります。常にバドリーノや先輩のババラオと行動を共にし、様々な儀礼の際に彼らから学んでいます。またフィエスタ(宗教的祝祭)などの集まりがある際は積極的に参加しています。また日夜、サンテリアのマニュアルを研鑽しています。今の私の使命はサンテリア信仰によって人類を救うことだと実感しています。最近ヨルバ文化協会の会員となりました。同協会ではいろいろな催しが行われ、学ぶべきことが多いです。キューバは経済的にとても困窮しています。多くの若者は大学教育を受けても職に就けなかったり、医学部を卒業して医者になっても給料がとても安く、生活できないといった状況にあります。多くのキューバ人が他国へ亡命したいとも願っています。そのような状況の中、サンテリア信仰が願いを実現してくれる偉大な力として多くの人々の共感を呼び、同信仰の拡大を促しているのだと思います。私もサンテリア信仰によってキューバをよりよい社会に導きたいと強く願っています。」

ここでは、サンテリア信仰によって人生が改善していった点が強調され

ている。彼は非常にアグレッシブな生活を送っていたが、イニシエーション儀礼を経て、サントを授けられ、パドリーノと人間関係を結ぶ中で、サンテローの仲間に対し非常に奉仕的な態度が育まれていったそうである。実際、彼とともに、彼の友人のババラオ宅で催される宗教儀礼に何度か参加したが、多くのサンテローが集まるそのような機会に、彼はよき子供のように皆に奉仕していたことが印象に残った。また彼は信仰を通じた生活態度の改善の中で、母親や友人を大切にするようになったそうであるが、彼の自宅では、彼が母親に料理を作り、食器も洗っていた。また私に対しても終始、非常に親切な態度であったことも事実である。興味深いことは、彼の宗教実践において、常に研鑽することが意識されていた点である。彼曰く毎日朝5時に起床し、サンテローアについて書籍で学んでいるという。組織化の傾向についてあまり危惧していないようであり、自身もヨルバ協会への所属についてポジティブにとらえていた。社会に関しては、自身は社会主義者であり社会の指導者としてフィデル・カストロを非常に尊敬しているとしながらも、人生の師匠はパドリーノであり、社会主義のキューバでの展開には間違った側面も多くあると主張している。またそのような社会をサンテローア信仰によって変革したいとの主張が、彼の考える自らの宗教実践の正統性と結びついていた。しかし同時に、彼の生活態度は、仕事を持たず、5人の前妻や子供たちに対する経済援助も滞っているという状態であり、上記の発言に矛盾が存在していることも印象に残った。もう一点彼について興味深く感じたことは、ハバナ市中に友人がおり、どこにいっても知り合いと出会っていたことである。彼曰く、サンテローアの実践によって多くの友人ができたという。彼には150人の弟子がいるという。

次は200人のアイハードを有するというババラオのコメントである。ここでは師匠と弟子であるパドリーノとアイハードの関係、サンテローアに関する知識の継承といった点についての考え方が提示されている。

Jさん (57歳 男性)

「サンテローアになって37年になります。家族みんなで信仰を実践しています。現在はババラオとして約200人のアイハードを持っています。ババ

ラオになるにはそれ相当の覚悟と準備が必要です。儀礼に関する知識とともに、それなりの経済的犠牲を払わなければなりません。家族もその犠牲に加わります。しかしより大きな犠牲があつてこそ、より大きな恩恵を被ることができるのです。サンテリーアにおいて重要なことは信仰心です。神とつながるといふ行為そのものが重要なのです。もちろんそのための知識も必要です。昔は師匠であるパドリーノと常に行動を共にし、直接様々な教えをこうたり、その行動を模倣するといった環境が存在していました。しかし現在ではそのような環境は大変難しくなっています。私の場合は、朝早くパドリーノの自宅を訪ね、3時間から4時間行動を共にし、またそれぞれの社会的活動に戻るというサイクルの中で、少しずつババラオとしての実践的知識と自信を獲得してきました。パドリーノとは本当の父親よりも親密な関係にあります。パドリーノの多くはアイハードに知識を伝達したくてもできないもの、アイハードの教義的逸脱をおそれて秘密を伝授しないものなど様々で、教えを授かることは非常にデリケートなテーマでもあるのです。私の場合、ババラオとして最初は本当に自信がなく、アイハードの指導をするにも困惑するといった状況でした。悩みによってはパドリーノや他のババラオに相談することもありました。また人類学者、例えばフェルナンド・オルティスやリディア・カブレラ、ナタリア・ボリバルらによって書かれた民族誌的テキストが存在しています。それまでは口頭伝承によって、また見よう見まねでババラオの知識、技術が継承されていたのが、それらの著作によって、より体系的に、またより統一された形でサンテリーアの知識を習得できるようになっています。フェルナンド・オルティスに関しては、宗教実践者ではありませんでしたが、実践者以上にサンテリーアに関する情報に精通していたと思います。そしてこのような著作はサンテリーアの発展に重要な役割を担っていると思います。さらにはそのような著作に影響されたババラオによって書かれた様々なサンテリーアに関するテキストが存在しており、私の場合、そのようなテキストをイファ占いなどのために、熱心に勉強しました。このような点は従来のサンテリーア信仰にはなかったものであり、サンテリーア信仰の発展にとって望ましい変化であると実感しています。しかし本当の知識は実践でしか

体得できないことも確かです。近年のサンテリーア信仰をめぐる変化としては、90年代以降、政府や社会からの偏見というものが非常に少なくなってきており、それ以前は隠れて信仰していた多くの信者が自らの信仰を公的空間においても表明するようになりました。私の父の時代はアイハードの指導に際しても、ひっそりとおこなうことが通常でした。当時は社会的な偏見も非常に強く、サンテリーア信者であることを表明することすら困難でした。もう一つの変化としては、キューバ・ヨルバ文化協会の誕生などにみられるように、サンテリーア信仰が組織化される傾向にあります。私個人としては、そのような動向には否定的な立場をとっています。たしかに文化の面ではポジティブな影響があると思います。しかし、サンテリーア信仰はより個人的な事柄であり、組織化される必要はないと感じているからです。ローマ法王を頂点とするキリスト教とは違うのです。パドリーノとアイハードスの関係に収斂される人間関係こそが、そして日常の悩みを共に解決の道に向かって進むことこそが、サンテリーア信仰にとって重要だからです。そしてそのような人間関係の根幹にオリージャスへの信仰心が存在し、各実践者の家において行われる諸儀礼やフィエスタによって活性化していくのです。ですから各信仰実践者の家こそが、実践の拠点であるべきなのです。その意味では寺院や協会などの存在は、それほど必要なものではないのみならず、従来のサンテリーア信仰の個人的実践、家族の実践を妨げるものであると考えます。またそのような組織化は、サンテリーアの正統性やヒエラルキー化の促進を企図した動向のようにも感じます。もっと自由で、個人的なものであっていいのです。それがサンテリーアなのだから。でも学校のようにサンテリーアの知識を体系的に教授してくれる機関があらわれればぜひ入学したいと思います。ただそのような機関は存在していません。日常から学ぶという点が重要なのかもしれませんね。また最近、誰もかれもが簡単にババラオになり、外国人を含む多くのアイハードを獲得しています。商売がうまいといった印象をうけます。そのようなババラオのほとんどがサンテリーアの知識や慣習を習得していないにもかかわらずです。彼らはマニュアル本を見ながら儀礼を行います。彼らから教義に関する自信がないとよく相談をうけます。ばかげた話です。

ほとんどは経済的利益を目的にサンテリア信仰を利用しているのです。そのような動向には嫌気がさしています。あなたにはぜひ入信してもらいたい。その後、今話せない様々な秘密について教えてあげましょう。キューバの現状については貧困や貧富の差の拡大など危惧すべき点がたくさんありますが、サンテリアはそのような社会体制へのメッセージとして機能するものではなく、あくまでも個人の信仰の次元にとどめられるべきだと考えています。もちろん社会がよくなるにこしたことはありませんが。私は個人的に、この信仰によって精神的な向上をめざしているのです。サンテリア以外のアフロ・キューバ宗教の実践に関しては、あまり関心をもっていません。パロ・モンテは実践することもあります。現在はサンテリアと融合しています。アバクアなどの宗教実践はサンテリアに比べより複雑であり、また秘密主義的です。サンテリアのように整合性を有した宗教ではないので関心がありません。」

ここでは、信仰の深化、信仰の継承において直接的な触れ合いの中でパドリーノから学ぶことの重要性が強調されていた。『状況に埋め込まれた学習』（レイヴ／ウエンガー 1993）での主張と結びつく内容となっているが、その彼においては、サンテリア関連の書籍が著されることは、サンテリア信仰の発展にとって意義深いことであると理解されていた。現在多くのババラオやサンテロが書籍を通じてサンテリアの理解を深めているが、そのような関係をポジティブに受け止めてもいた。しかし本当の知識は実践でしか体得できない、というコメントには、書籍のみでは、ババラオとしての知識が十分に体得できないという主張が示唆されていた。

一方、組織に関しては、批判的な考えが提示されている。サンテリア信仰が個人的、家族的宗教実践であるという主張は、現在進行中のサンテリアの組織化が権威主義やヒエラルキー化を促進しているという危惧と結びついているのである。しかし同時に、いい加減な信仰によってババラオになったものたちに対し、彼らが正統な知識を有していない、との批判を投げかけながらも、書籍を重視する態度や、サンテリアの儀礼実践を教示してくれる教育機関があらわれたらぜひ入学したい、とのコメントなどから、彼の中

では、サンテリーアの正統的知識に対する彼の真摯な態度と組織化、権威化を危惧する不安が揺れ動きながら混在しているということが理解できるのである。なお先行研究においては、サンテリーア信仰の正統性をめぐる動向においては、パロ・モンテやアバクアという実践には距離を置き、それらをネガティブな習俗と捉える傾向が強くなっているということであったが、彼において、またその他のババラオにおいても、アバクアに対し否定的な見解を有していた反面、パロ・モンテについては、サンテリーアと融合したものであり、多くのババラオやサンテローがパロ・モンテの宗教要素を活用しているとコメントしており、先行研究における主張の中に一部誤りがあることが判明した。

続いては、2年前にサントを授けられた女性のコメントである。

Eさん (58歳 女性)

「私はハバナ大学の事務員をしております。家族でサンテリーア信仰を実践しているのは私だけです。2年前にジェマジャのサントを授かりました。夫は共産党の職員で、現在は退職していますが、全く宗教には関心もっていません。私はそれでいいと思っています。しかし私の信仰活動には様々な形で協力してくれています。私の守護神はジェマジャです。海の神です。私の入信動機は病気です。医者に見放された病がもとでババラオの診断を受け、入信を決意しました。まだ完治したとは言えませんが、入信以後、病気は確実に回復に向かっています。本当に驚くべき力です。サンテリーア信仰の素晴らしさは、非常に現実的な力に根差しているということです。以前、カトリックを信仰していましたが、天国や形而上学的な話を中心でした。しかしサンテリーア信仰は、今日、今の問題を解決してくれるのです。その点が、現在、キューバでサンテリーア信仰が拡大している最大の理由であると思います。」

ここで特に興味深い点は、カトリックがより啓示的な宗教であるのに対し、サンテリーアがより現実的な宗教であると主張している点である。サンテリ

ア信仰は即効性があり、現実を変革する力であることが強調されているのである。

またサンテリーア以外のアフリカ系宗教については以下のようにその無関心な態度を示していた。

「死者への崇拝に基づくパロ・モンテなどの信仰もありますが、それらはよりネガティブな実践だと理解していますので興味はありません。」

さらにサンテリーア信仰に関する男女の立場に関しては次のように語ってくれた。

「男性のみが宗教的指導者としてのババラオになれるという点に関しては、男女の差異があるので当然だと思います。女性には生理があり、ババラオにはなれません。女性には女性の特質があります。女性は男性に尽くすものであり、男性が女性の指導を司るということは至って当然のことであると考えます。」

キューバにおけるサンテリーア信仰では、ババラオと呼ばれる指導的存在は、男性に限定されたものとなっている。その点について、彼女は、女性には女性の性質があり、男性に貢献することがその役割であるとし、ババラオが男性に限定されていることに何の矛盾も抱いてはいない。この点は今後、社会の中でよりジェンダー意識が共有されていく中で変化していく可能性を含んだテーマであると考えられよう。現在、何人かの一般女性信者へのインタビューでは、男性重視の教義に疑問を抱いている見解は存在していなかったが、一部の女性リーダーにおいてはそのような疑問は顕在化しつつある。

次に紹介するのは、2013年に死去している女性リーダーのコメントである。

ナンシー・ブジェスさん（年齢不詳 女性）

「私は幼少のころから家庭環境で大変な思いをしました。家族の宗教的

影響によってサンテリア信仰を深めることができましたが、現在は、サンテリア信仰をベースとした宗教資源、例えばこの寺院を社会貢献、具体的には恵まれない子供たちへのサポートのために活用していきたいと考えています。またアフリカ系の文化を保存するという目的のために利用していきたいと考えています。実際、私の寺院では定期的に、子供たちにアフリカ文化を通じ、学習の習慣を根付かせ、社会貢献などの重要性を訴えています。そのような活動が評価され、ユネスコからも顕彰を受け、日本でも講演する機会を頂きました。このような活動をもっと発展させていきたいと考えています。信者が増えるかどうかは第一の目的ではありません。現在、こうした社会活動、教育活動をより理論的観点から発展させていきたいという関心のもと、文化人類学、教育人類学の博士号取得を目指しています。ブラジルでサンテリア研究に従事していたイレアーナ・ホッジ博士の指導のもと論文執筆に従事しています。そのことによって自らの宗教実践を相対化し、より深化させることができると考えています。また博士課程の勉強を通じて、児童教育の専門的知識を習得し、その知見を生かし、より幅広い社会貢献を展開していきたいと思います。私は女性のサンテロですが、多くの知識を有していますし、経験もあります。この宗教によって男性以上に社会貢献をしていく自信はあります。』

プジェスさんは自ら「オジャ寺院」を開設し、2007年よりフェルナンド・オルティス財団の協力によりコミュニティ・プロジェクトを開始した。2009年には、財団法人ユネスコ・アジア文化センターより顕彰（コミュニティによる無形文化遺産の活性化に対する優良事例として）され、日本にも招聘されている。

彼女の死によって同組織は運動を終了したが、死去するまでに掲げられていた同プロジェクトの趣旨は「我々の祖先が遺し、今に伝わる実践的な多くの文化遺産を活発に実践することで、消滅の危機を回避し無形文化遺産を救い保存する」「資源の乏しいこの町の青少年に対して然るべき教育を施す」といったテーマが掲げられていた¹³⁾。

彼女のコメントにおいて興味深い点は、明確には、男性中心的な宗教教義

に対する批判がなされていないものの、知識の保有に関し自信を示しているとともに、男性以上に社会貢献をしていくことが可能であるという点が強調されており、非常に興味深いコメントとなっている。彼女においては、人類学的実践が自らの宗教活動の基盤として、重要なものとされている。



写真5 オジャ寺院
(筆者撮影2013年8月 ハバナ市)

彼女の指導教官を務めていたイレアーナ・ホッジ教授に確認したところ、現在、男性、女性に関わらず、人類学を学ぶサンテリア実践者が増えており、そのような動向の中では、自らの宗教実践を社会科学的に再定義し、より普遍的な言説のもと、布教活動においてのみならず、国内外のアフリカ系宗教実践者における正統性の獲得を意識した活動を展開するといった傾向が顕在化しているという。今回の調査ではインタビューできなかつたものの、人類学者であるネルソン・アヴォイという信者が、「25世紀にわたるサンテリアの歴史」という長文の博士論文を執筆し、自らの信仰実践に援用していることも確認できている。内部の視点を有する研究書の一つとして興味深いとともに、正統性をめぐる宗教実践への人類学の応用という点でも考察の対象に値するものであろう。

最後のコメントはこうした学術的傾向と宗教実践をさらに明確に意識した男性リーダーのものである。

エンリケ・アレマンさん (年齢不詳 男性)

「私は大学病院で疫学の教授をしています。また人類学についても深く学んだ経験があります。トランス・クルトゥラシオンといった概念とともに、フェルナンド・オルティスを筆頭とするキューバの人類学によって提

13) <http://www.accu.or.jp/ich/jp/community/oja.html> (2013年8月6日参照)

示された知見は非常に重要な視点を提供してくれています。また現在信仰しているグローバル化によるローカル文化の顕在化、ヘゲモニーといった考え方などはキューバの宗教を理解する上で非常に参考になります。従いまして、私の宗教実践においては、科学、つまり自然科学としての医学と社会科学としての文化人類学的知見に依拠しつつ、自らの宗教実践に対し、より科学的な解釈を確立しようと企てています。自らの宗教実践にそれらの科学的概念を援用するようにしているのです。文化人類学における宗教概念は一通り勉強しました。今はそのような概念に関する理解をもとに、我々の信仰実践をより普遍的なものに発展させるべく努めています。具体的にはサンテリーア、パロ・モンテ、心霊主義という3つの宗教文化をより制度的なものにし、科学的論拠にも耐えうる宗教的実践の理論を整備し、社会的、文化的、科学的に正統性を有した宗教的知識を多くの信者と共有・継承しゆく環境を整えているのです。そのためのヒエラルキー化は必要であると感じています。なぜなら、現在、多くのキューバ人が自らをバラオであり宗教的職能者であると名乗り、経済活動に腐心しているからです。我々はヨルバ系宗教をそのような状況から救う使命を担っていると感じています。」

ここでは、トランス・クルトゥラシオンや、グローバル化、ヘゲモニーなどのタームが登場する。アレマンさんは現在、カピルド・キシクアバという組織を設立し、より組織的な活動を展開する中で、サンテリーア、パロ・モンテ、心霊主義を結びつけた信仰活動を体系化しようとしている。その際、人類学、心理学、医学などの諸理論が自信の宗教解釈の中にとり込まれ、より整合性のある論が形成されつつある。筆者がインタビューのため氏を訪問した際には、筆者の問題意識やアフリカ系宗教に関する知識などを問い詰められるといった状況となり、人類学者がどのような目的で何を探求しようとしているか、といった点について、ある程度予想をもってインタビューに対峙するといった態度が顕著であった。また情報の開示に対してもかなりシステマティックに処理することを心掛けており、ある程度懇談したのち、これ以上の情報がほしい場合は、1500ドル支払い、入信儀礼を経た後で対応しま

す、と窓口を閉ざされてしまった。その後氏とのやりとりはあるが、同組織についての本格的な調査は実施できていない。

ちなみに同団体のホームページには、アフロ・キューバ文化継承のためのイベントをはじめ、青少年のための伝統文化に関するワークショップ、



写真6 カピルド・キシクアバの拠点
(筆者撮影2014年8月 ハバナ市)

犯罪防止のためのセミナー、健康セミナー、シングル・マザーを対象としたセミナー、アルコール中毒者を対象としたセミナーなど様々なイベントを開催していることが強調されている。またイニシエーション儀礼、教義に関する講義、ミサ、太鼓儀礼、予言などの活動が周期的に開催されていることが告知されている。さらには、以下のような指針が提示され、信者の社会生活上のための教育的環境が整備されつつあることが示されている。

- ① 知らないことを述べてはならない
- ② 基礎知識なしに儀礼をおこなってはならない
- ③ 他者を間違った道に導いてはならない
- ④ 同胞に欺いてはならない
- ⑤ 智者でないものが智者であると偽ってはならない
- ⑥ 自己中心的ではなく、謙虚でなければならない、
- ⑦ 同胞に悪意を抱いてはならない
- ⑧ タブーを犯してはならない
- ⑨ 聖なる道具を衛生的な環境で維持しなければならない
- ⑩ 寺院を清潔に保たなければならない
- ⑪ 弱者を尊敬しやさしく対応しなければならない
- ⑫ 年長者を尊敬し守らなければならない
- ⑬ 道徳法を遵守しなければならない

- ⑭ 友人を決して裏切ってはならない
- ⑮ 決して秘密を明らかにしてはならない
- ⑯ 社会階級にかかわらず同胞を尊敬しなければならない¹⁴⁾

このような動向は、政府が指導する宗教活動における方向性とも一致しているとともに、サンテリーア信仰が社会により広く承認されるための活動であると考えられよう。さらには、このような活動を通じ、より正統な宗教的権威をキューバ社会、および国際社会の中で獲得するといった方向性が存在していることも示唆しているのである。

以上のようにサンテリーア信仰に関する解釈は非常に多様であり、その信仰形態や解釈は信者によって様々である。しかし従来の信仰実践において、共通項として考慮されるべきは、日常における信仰心、つまり現世利益という特徴、生活を改善するという目的がこれらの信仰のベースに存在している点であり、そのためにも宗教的知識を師弟の関係から体得し、また場合によっては書物から補足し、信仰実践を深化するという点にある。しかし最後に見た事例では、現在は組織化の流れが顕著となり、社会的ヘゲモニーをめぐる宗教実践としてその性質を変容させつつあるといった傾向も一部に存在していることが理解できよう。次章ではその点についてさらに掘り下げて考察したい。

4. キューバ社会の状況およびサンテリーアの組織化とその背景

現在、キューバ政府は信教の自由に関する寛容な態度を強調する一方で、政府の方向性により協調的な態度を示す宗教団体を保護する政策を展開している。政府の方針の中には「宗教が同胞への愛と、無視無欲の態度、弱者の保護、家族の連帯、社会的正義、道徳的貞節、祖国への愛と犠牲を促すのであれば革命にとって問題とはならない」¹⁵⁾ といった方向性のもと、今日カト

14) カビルド・キシクアバの公式ホームページより。http://www.cabildoquisicuba.cult.cu/ (2015年1月9日参照)。

リック教会は、街の清掃活動など、革命防衛委員会によって推進される公益事情に参加するよう信者に促している。

同時に現在、キューバでは外貨獲得の中心的政策として観光に力を入れている。多くの外国人がアフロ・キューバ文化に触れるという目的のため、キューバを訪れ、観光客相手のサンテリア儀礼を体験するとともに、本物のサンテリア儀礼に参加し、場合によっては入信するといった状況が顕著となっている。そのような動向は当然、国家の経済政策にも影響を与え、現在、観光資源の中にそのような宗教体験を謳うツアーなどが様々な旅行会社によって促進されつつある。

また移民政策は緩和し、キューバ国民と海外に居住する亡命キューバ人とのコンタクトは従来に比べ容易にそして頻繁になっている。北米に住むアフロ・キューバ系宗教の実践者たちは、1970年代頃から組織的な活動を展開しているが、多くは現在、キューバにおけるヨルバ信仰の真正性を訴える傾向にある。

一方、サンテリアをはじめとするオリーシャ崇拝に関するトランスナショナルな文脈に目を転ざると、現在、ブラジルではアフロ・アメリカンズと称する動向が顕著となっている。自らの信仰をアフリカと強く結びつけ、より本質主義的、人種主義的観点から提示しようとする動向である。そのような流れの中には、ナイジェリアの出身の人々が自らの宗教起源の正統性を訴えながら、各地のヨルバ宗教運動でリーダーシップをとるといった傾向も確認されている。そのような傾向に対し、キューバ政府は、政治、経済、文化的な意味において新たな挑戦を強いられている。つまり、世界におけるアフリカ起源の宗教に関する聖地、巡礼地、宗教的真正性を担保するツーリズム拠点として同文化資源を他の地域に対し独占できるか、という岐路に立っていると言っても過言ではない。実際、今回の調査で聞かれた話の中で、キューバは正統なるサンテリアの拠点、発祥の地、アフリカには既に存在しない伝統の存続する地、といった言説が強調されていた。

15) 政府宗教局のカリタ・ディエゴ局長のコメント（筆者のおこなった2013年1月のインタビューにて）。

そのような文脈において、キューバ国内の研究者によるサンテリーア研究もその方向性が同宗教のキューバにおける正統性を主張する傾向を強めている（Bolival 1991ほか）。

特にネオリベラリズムに対し、国民文化をより強固なものとするための戦略として、「民族誌学は文化的アイデンティティの強化に貢献すべき」（Bolival 1991）といった主張のもと、サンテリーアをこれまで以上にキューバ性と結びつけて論ずる研究が顕著となってきているのである。

キューバにおけるサンテリーア信仰の純粋性およびそれをめぐるヘゲモニーの獲得においては、非常にナショナリストックな傾向が顕在化しているが、信者においても、キューバ国外にアイハードを有することがキューバ性の証明となることが意識され始めている。

またキューバ国外においてヨルバ宗教の専門家、研究者というようなカテゴリーにおいて、サンテリーアに関する講演を行うといった活動も盛んになってきている。このような動向はナショナルな傾向ではなく、トランス・ローカルな現象としても理解できよう。

そのような背景のもと近年は、サンテリーア信仰の純粋性をさらに維持、強化していくため、同信仰をめぐる組織化が進展している。そこでは、医学や人類学、心理学、社会学などの知見が用いられ、国内外の研究機関や研究者、大学やユネスコなどの国際機関、NGOなどとも連携し、サンテリーア信仰の教義、儀礼、慣習、解釈などを統一的なものにするべく活動が展開されている。そのような動向においては、パドリーノやマドリーノが我が子のごとくアイハードの面倒をみる、といった伝統的な宗教活動よりも、政府や海外の諸団体からその正統性を承認されることが重要な目的であると揶揄されている。そのような動向の中心的存在は、キューバ・ヨルバ文化協会である。

同協会は、前会長であるアントニオ・カスタニェダ氏とそのグループによって政府による法的認可のもと1991年にハバナ市に設立される。協会の目的は、宗教や芸術をはじめとするヨルバ文化の普及とされている。カスタニェダ氏は、1946年ハバナ市生まれで、宗教的实践とともに、クラリネットやサクソフォン、フルートの演奏など音楽的活動にも従事し、同協会において



写真7(左) 写真8(右) ヨルバ文化協会の会員証
(筆者撮影 2014年8月 ハバナ市)

も様々な音楽を中心とした文化活動が展開されている。カスタニェダ氏は1965年よりババラオとしての活動を展開し、1976年にはフィルベルト・オ・ファリル氏という傑出したババラオを指導者にむかえ、その他のババラオ達とコフラディアを設置する。

なお同協会の会長となったカスタニェダ氏は2008年以降、政治活動にも積極的に関与し、協会の発展に大きく貢献したが、2014年7月21日、心臓発作により死去しており、協会は新しい会長としてホセ・ペレス氏を選出している。ブレンサ・ラティーナによると、同協会には20000人のメンバーが登録しており、海外にも26の所属団体が存在し、現在のキューバで最も影響力のあるヨルバ系宗教の団体とされている。

同協会のメンバーは年々増加の一途をたどっているが、その理由としては、協会への登録により発行される会員証が様々な恩恵をもたらすとされている。

同教会に最近加入したAさんは、筆者に対し嬉しそうに会員証を提示し、そのメリットについて「これで神に認められるババラオという資格にくわえ、人々、キューバ社会に認められるババラオになりました。つまり国家の宗教に所属することができたのです。これは社会的評価であり、この会員証は様々な証明書になるのです。年間45ペソ（キューバ国民貨幣）の年会費を支払うことで会員になれるのです。より簡単に海外に行けるといことも聞いています」とコメントした。またAさんは、「このような協会に反対の姿勢をとっている年配のババラオ達がいることは知っています。Comisión Organizadora de la Letra del Año Miguel Febles Padrón（ラ・カソーナ・



写真9 ヨルバ文化協会拠点
(筆者撮影 2014年8月 ハバナ市)

デ・ディエス・デ・オクトゥーブレ) という団体は実はヨルバ協会よりも多くの人に支持されていると聞いています。」とヨルバ協会に対立する動向が顕著になってきていることについても言及してくれた。しかし彼の場合、ヨルバ文化協会から得る利益一知識や人間関係の拡大—は重要

なものであり、同協会に所属できて満足しているようである。

ところで、同協会は1992年以降、ヨルバ宗教に関する様々な国際的イベントをキューバ政府の補助金のもと開催している。そのようなイベントにはナイジェリアのワンデ・アビンボラ氏なども招聘された。その際、アビンボラ氏は、ヨルバ協会における知識と実践の正統性を承認するとともに、ヨルバ宗教の布教におけるキューバの価値を高く称賛した。

ただそのような動向に反感を抱いているババラオなども少なからず存在している。反感の理由は、インタビューにあったように同協会が「サンテリーアの権威を独占するものである」「民衆の活力を抜き去ってしまうものである」「個人的、家族的な環境で発展してきたサンテリーア信仰の性質そのものを変化させてしまうものである」といった言説によって理解できよう。

しかしそのような批判がなされる一方で、同協会は、社会における公益事業などに積極的に参加するとともに、「礼儀正しく」「年長のをを尊敬し」などの方針を掲げ、倫理的観点において、国家の政策と連動した「模範的」活動を展開し、社会における宗教的正統性を急速に獲得しているのである。また1992年以降は年間の国の方向性を占う「レトラ・デル・アニョ」を提示し活動の指針を共有している。そこでは、アルコールやドラッグの危険性、サンテロたちによる公共活動への貢献の重要性が訴えられており、政府の方向性に忠実な方針のもと運動が展開されているのである。

2014年8月15日の16時より、協会においてカスタニェダ会長の追悼セレモ

ニーが催された。キューバで現地調査を行っていた筆者の滞在期間と付合したため、筆者も会場を訪れることができた。会場には、カトリック教会関係者の姿は確認できなかったものの、事前に同協会から招待状によってセレモニーを告知された政府宗教局のカリダ・ディエゴ女史をはじめ、ババラオなどのサンテリア信仰者、心靈主義者、イスラム教や仏教団体の代表者らが約300名列席した。

会場で配布されたプログラムには、カスタニエダ氏の死を悼み、彼の芸術的思想を共有するものたちによるショーを披露する、との趣旨の一文が記されていた。

セレモニーでは、最初にカスタニエダ氏への哀悼のメッセージが朗読された。そこでは宗教家、芸術推進者としての彼の業績を称えるとともに、彼の有した友愛の精神、他宗教との共存の精神、社会貢献、ヨルバ文化宣揚の精神を協会は継承していきたい、との趣旨が示された。

続いて、種々の民族舞踊が協会の構成員によって披露されていった。多くの歌はジェマジャヤオチュンなどサンテリアの神々の名を含み、バタ太鼓の演奏をバックミュージックに、民族衣装を着用した若者たちが所狭しと舞踊を披露した。どの演目も非常に高いレベルで、プロフェッショナルな領域に近いものであった。セレモニーは2時間で終了したが、会場では多くの宗教実践者が未亡人となったカスタニエダ氏の夫人に哀悼の意を表していたと共に、各宗教団体の代表者間で、また政府関係者との間で、挨拶が交わされ、短時間ながらも近況などについての情報交換がおこなわれていた。

このようなセレモニーは様々な宗教団体が相互的に関係を維持していくためにキューバでは頻繁に催されているようである。同イベントに参加した筆



写真10 追悼セレモニーの様子
(筆者撮影 2014年8月 ハバナ市)

者の印象としては、表面的には文化行事として芸術性がアピールされていたが、そこには、ヨルバ系宗教の正統性、およびそこから派生しうるヒエラルキー化を同宗教習俗内外に再確認するための装置として機能しているように感じられたとともに、多様なヨルバ系宗教文化の単一化を図る政府の方針を流用する動向であるように感じられた。

そのような印象が大きく間違っていないことは、同イベントにおいて、カスタンニダ氏の妻であるヘオルヒーナさんへのインタビューに対する次のような言葉の中からも確認できうるであろう。

「現在、ヨルバ協会は70もの団体が所属し、世界中にネットワークを拡大しつつあります。愛国者であり宗教者であり戦士であった亡き夫の意志を引き継ぎ、ヨルバ協会はヨルバ文化、ヨルバ宗教の発展のため、国内外の信者の宗教実践を先導していきたい。」

なお同イベントでは、新会長に就任したホセ・マヌエル・ペレス・アンデイーノ氏とも懇談する機会を得たのでその内容を紹介したい。

「我々はこの協会を通じて、サンテリリアヨルバ系宗教に秩序を形成しつつあります。また国家の方向性にしがたより健全な宗教活動、つまり社会貢献や芸術活動を通じた模範的市民の育成に従事しています。決してヨルバ系宗教の正統性をめぐる権力闘争やヒエラルキー化をめざすものではありません。しかし様々な錯綜した宗教実践に一定の方向性を与え、我々の宗教実践をより深化できればこれ以上の喜びはありません。そのため、多くの文化活動や研究者を巻き込んだシンポジウムなどを開催してきました。その方向性は今後、ますます活発なものとなるでしょう。亡くなった前会長の意志を引き継ぎ、ヨルバ宗教をより普遍的なものとしていきたいと考えています。」

以上から、ヨルバ文化協会はこれまでの方針どおり、同協会が推進する運動において、文化的側面をより強調しつつ、キューバ国内におけるヨルバ系

宗教の秩序化、統一といった方向性をより広範に模索していくと考えられるのである。

5. おわりに

以上みてきたとおり、サンテリア信仰をはじめとするアフロ・キューバ系宗教は国家の方針や国内の人類学的研究者によって、差別され隠蔽されるといった歴史的経緯を経た後、政府の政治、経済、文化的方向性の変化によって、近年では社会空間において顕在化しつつある。それまで音楽、舞踊のみをアフロ・キューバ文化として取り上げてきたキューバ政府は、グローバル化の影響に促進されながら、アフロ・キューバ文化の根幹にあった宗教性に注目せざるを得なくなり、そのような動向に付随する形で、同国の人類学者の一部は同宗教習俗のキューバ的独自性を強調するに至り、現在では、それらを国民文化に位置づけようとしているのである。そのような動向において、サンテリア信仰がキューバ社会の中で活性化し、教義的正統性の確立や組織化の流れも進展してきた。同時にキューバへの観光客やキューバからの国外移住者の影響により、キューバそのものがサンテリア信仰における重要なスポットとなってきた。

サンテリア信仰の実践者は、同宗教の個人的側面や家族的環境を重視する一方で、組織化を図る人々はサンテリア信仰の普遍性を標榜する。組織化に否定的な信者においては、サンテリア信仰の正統性を標榜しつつも、そのような組織化の流れが同信仰の権威化、制度化を推進し、本来のサンテリア信仰における民衆の性質¹⁶⁾を変貌させてしまうのではないか、といった点を危惧している。

さらには、そのような過程において、アフロ・キューバ系宗教の実践者が同時に人類学的研究に従事するといった傾向も顕著となり、彼（彼女）らの

16) 民衆という概念に関する筆者の見解はすでに別稿で示している。詳しくは「メキシコ民衆文化としてのルチャ・リブレ：テクニコ・ルードをめぐる儀礼性・遊戯性」（井上 2008）を参照のこと。

言説がそれらの宗教実践に用いられ、同時に、社会貢献や公益事業への参加といった国家による政治的方向性が流用されてもいる。キューバ国家はそのような傾向を戦略的に活用しつつあるが、このような動きは近年はじまったばかりであり、今後の動向が注目されるところである。

なお今後の課題としては、パロ・モンテ、アバクアとの関係、女性信者のサンテリーア信仰への影響の拡大について調査を継続していきたい。またハバナ市以外の傾向、特にマタンサでの調査の実施を検討している。また、信仰に関する知識の伝承の変化がどのような影響をもたらしているかを考察したい。

〈和文引用文献〉

- 井上大介, 2008, 「メキシコ民衆文化としてのルチャ・リブレ: テクニコ・ロードをめぐる儀礼性・遊戯性」『ソシオロジカ』Vol. 32, No. 1・2。
- 井上大介, 2012, 「サンタ・ムエルテ教会をめぐるヘゲモニー」『ソシオロジカ』Vol. 36 No. 1・2。
- 工藤多香子, 1998, 「『文化』をめぐる戦略と操作の相克 キューバ・サンテリアの儀礼太鼓バタを中心として」『民族学研究』62(4): 494-516。
- 工藤多香子, 1999, 「90年代キューバ, アフリカ系カルトの行方 観光商品化されるサンテリア」『ラテンアメリカ・カリブ研究』5: 12-27。
- 大杉高司, 2003, 「ある不完全性の歴史: 20世紀キューバにおける精神と物質の時間」『文化人類学』69(3): 437-459。
- レイヴ, ジーン/ウェンガー, エティエンヌ, 1993, 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』佐伯胖訳, 産業図書。
- 上杉富之, 2004, 「人類学から見たトランスナショナリズム研究: 研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』第24輯: 126-84。

〈欧文引用文献〉

- Angarica, Nicolás, 2009, “El lucumí al alcance de todos”, *Estudios Afrocubanos*,
- Argyriadis, Kali, 2005, “Religión de indígenas, religión de científicos: construcción de la cubanidad y santería”, *Desacatos*, No. 17: 85-106.
- Barcia, María del Carmen Rodríguez, Andrés and Niebla, Milagros, 2012, *Del cabildo de “nación” a la casa de santo*, Fundación Fernando Ortiz.
- Bolívar, Natalia, 1990, *Los Orishas en Cuba*, Ediciones Union.
- Cabrera, Lydia, 2009, *El Monte*, Letras Cubanas,.
- Guanche, Jesús, 2010, *Artesanía y Religiosidad Popular Cubana: La diversidad y sus elementos plásticos*, Consejo Nacional de Casa de Cultura.
- Cabrera, Lydia, 2009, *El Monte*, Letras Cubanas.
- Castro, Fidel, 1985, *Fidel y la religión*, Oficina de Publicaciones del Consejo de Estado.
- Guanche, Jesús, 1983, *Procesos Etnoculturales de Cuba*, Letras Cubanas.
- Ortíz, Fernando, 1984, *Ensayos etnográficos*, Ciencias Sociales.
- Ortíz, Fernando, 2007, *Los negros brujos*, Ciencias Sociales.
- Ortíz, Fernando, 1940, “Los factores humanos de la cubanidad (Conferencia, 28/11/1939, Universidad de la Habana)” *Revista Bimestre Cubana* Vol. 14 (2): 161-186.
- Lachatañere, Romulo, 2011, *El sistema religioso de los afrocubanos*, Ciencias Sociales.
- Menéndez, Lázara, 2009a, *Estudios Afrocubanos*, Vol. 1, Editorial Félix Varela.

Menéndez, Lázara, 2009b, *Estudios Afrocubanos*, Vol. 2, Editorial Félix Varela.

Menéndez, Lázara, 2009c, *Estudios Afrocubanos*, Vol. 3, Editorial Félix Varela.

Menéndez, Lázara, 2009d, *Estudios Afrocubanos*, Vol. 4, Editorial Félix Varela.

〈ホームページ〉

<http://www.accu.or.jp/ich/jp/community/oya.html> (2013年8月6日参照)。

<http://www.cabildoquisicuaba.cult.cu/> (2015年1月9日参照)。

An Anthropological Study of the Santeria Cult in Cuba

INOUE Daisuke

Abstract

This study describes the Santeria Cult in Cuba from three perspectives: the lineage of anthropological research from the early twentieth century, the actuality of religious practice of the Santeria in Habana, and the organization and background of the cult.

The Santeria cult is a syncretic religion derived in Cuba from the Yoruba and Catholic religions.

This article argues that the Santeria cult, which was historically hidden in society because of the political and cultural strategies of the Cuban government, has been actualized as a result of a transformation in the Cuban political and economic situation. This article also points out that this trend will promote a popularization of the Santeria cult in Cuba in terms of artistic movements, communication among academic researchers, and social welfare contributions.